

引退所感

檜崎 広之助

学校を去ってから数ヶ月を経たが、再び芙蓉で親愛なる諸君に談る機会を与えられることは誠に懐かしい。

本県の学校は、学力一斉調査や勤務評定問題で、又々騒いで居る。高等学校では教員組合が九月一日の始業式の前夜から徹夜の団体交渉をやる由である。

この様な無鉄砲な組合の圧力と県や文部省間に挟まれて立往生をして居る校長諸氏の苦衷には、本当に同情を禁じ得ない。

豆子

世間の騒動を余所に、まるで別天地にあった附設高校の幸福を、私は思い比べて今更ながら感謝をして居るのである。私の豪けたものは斗争ではなくて、協力と支援であった。大学当局の理解ある支持、全職員の撓まざる努力、生徒の真摯なる学風、後援会並びに同窓会の力強い支援悉く凝って一体となり、我が校教育推進の為に注がれた。

創立間もない附設高校が若干の実績と声価を勝ち得た所以は実にここにあると信じて居る。大内先生を迎えて、愈々挙校一体、校途進展の実を挙げられる事を期待して居る。

わが校の声価があがるに伴って、世間には準備教育だとか偏向教育だとか悪声を放つ者が出て来る。しかし、これを偏向教育というならば、大都市の高校は悉く皆それである。殊に東京都の所謂有名校などは其の最たるものである。

お盆過ぎの某日、孫を見んとて小倉に行つて市電に乗る。課外授業帰りの高校生六、七人頻りに問題集を研究して行く。その向う側に座つた中学生三人、カバンを膝に、頭を窓枠にのせて、皆眠むそうに目をつむつて居る。早朝から駆り出された課外の帰えりと見える。孫の家に行つて見れば、ここでも小学校六年、中学三年、高校二年悉く課外で休暇中も休みではない。彼等を引き連れて何処かへ遠征などとい

うプランは到底実現しようもない。近頃届いた福高同窓会誌に、同校の或る元の先生曰く「福高もあまり進学に汲々として偏向路線をたどって居る様だ」。また先日修猷館の一父兄が筆者に曰く「修猷館は進学一本で実に徹底して居ますね」。

こういう高校教育の状況は決して理想的とは云われない。高校では英米のそれに於けるが如く餘裕綽々、勉学もする。人間も練るといふ式が最も望ましい。

しかし国情を異にする我が国では、遺憾ながら冷厳な入学試験の難関が存在し、彼等は之を突破すべく余儀なくされて居るのである。

そこで、彼等の志望に順応し、及ぶ限り環境を整えて学力を増進し、其の志を遂げしめることは至当の適性教育であるといはねばならぬ。殊に我が附高の真摯勤勉な学風、自主自律明朗な校風は、即ち勤労と責任を重んじ、事に堪える人材を育成するという教育の理想に合致するものであって、決して矛盾するものでない事は私の常に力説した所である。

さて、私は多くの師友や先輩、同僚、子弟などの恩顧に支えられて私に与えられた人生の役割を何うやら勤めた了えた幸福をつくつく感謝して居る。しかし、よくよく顧みれば日暮れて道尚は遠き感が一杯で、中々安心立命の境地など及ばぬことを慚かしく思う。

大慧禅師の様な高僧でも「我既に悟道に達し、何事も思う儘であるが、夢に俗念の出るのは如何とも致方がない」と嘆じたということである。漱石も「夢十夜」の中に「数知れず夢は見るが、あまり自慢になる夢は見ない」と云って居るので、つまりぬ夢ばかり見て居る私も自からを漸く慰めて居る次第であるが、年は既に孔夫子よりも追い越したのであるから、時には堯舜を夢見る様に精進せねば申訳がないと考へて居る。

送檜崎先生序

大石龜次郎

先生者、本州山陽道之人也。姓廣池名廣之助。往西海道筑紫路、而氏檜崎矣。夙學英語學。広島高師。採鞭於中學明善校。而教示懇到誘導峻烈。門下多俊秀。令閨亦嘗鞅掌育英。兼茶道。四兒悉逸材。其第三子斃。太平洋海戰殉護國。嗚呼。此間先生歷任三池。伝習館。中學校長。次為福岡県視學官。昭和七年四月。受川口先生之後。來任明善校長。時、余既為教頭。附麒麟尾鞠躬從事。居四年。分袖先生巡遊柳河高女。三瀧中學十年也。

越、廿五年四月。久留米大學。附設高等學校。將養成國家有為之士。校長板垣副檜崎。而先生來而召余。爾來十有二年。先生拮据經營。立案妥當。傾聽參酌。而練思周密。附高名門之稱。普遠近可謂良吏良師。

先生天資聰明峻嚴。而有駘蕩之温情。

侃諤不撓、而無怨嗟反逆之仇敵。教育五十年。立功不朽之盛事、成於此矣。

先生居常愛花木、尊中庸之義。旗亭談扁額、書画温泉論詩文之軸、輻健脚登山。教養不知倦。

昭和卅六年六月。耳力軟聽。讓職後進。蘊蓄之士大内覺之助先生。而入悠悠。自適之境。衆皆莫不愛惜者。蓋功成、名遂、而身退。天道之謂乎。余回觀伴侶三十年之恩顧。捧感謝為送序。

昭和卅六年七月一日

檜崎先生と私

川口孫治郎明善校長は私が佐賀県師範學校一年生の頃、修身と英語とを教はった恩師である。私が二年生になる時、先生は教職を去って京都大学の法学部に入學せられ、奥さんは京都の女學校に奉職して先生の勉學を助けられた。私が師範を卒業して鳥栖小學校六ヶ年勤務の後、東京麹町区の漢學塾二松學舎で勉學中、東京朝日新聞

は、飛弾高山の中学校長川口孫治郎先生著「杜鵑の研究」広告を載せた。私は久瀧のおわびと追懐とをこめて御手紙を贈った。それから数年。私は大正五年四月以来満五ヶ年の東京生活を了って、大正十年の四月に、福岡県立中学（旧制）明善校教諭として、川口孫治郎先生に採用して貰った。爾来十有五年間、私の生活は報師恩謝の念で常にわき目もふらずに明善校と終始していった。採用後十年。川口先生は教頭物色難の揚句に到頭二人の先輩を飛び越して私を教頭に摘出してしまった。先生は公務の相談に行くとき夜の十一時頃でも高麗雉の皮を剥いでその餌袋の中から、粒々の餌をピンセットで詳細に調査して居られることもあった。さすがに日本鳥類生態学の大権威である。ところが先生にも、教育規程の定年が来て、校長の退職が近まった。其の人格と手腕と健康と意気とを惜しむ明善校の同窓会は、其の留任運動に躍起した。やがて明善卒業生は、学士博士の大先輩を中心に、櫛原町秋葉神社の伏龍団を根拠として、熱心素直な討議の結果、私と酒井君とが県当局に運動折衝する事になった。そこで、私達二人は、福岡の県庁に中山佐之助知事を訪うて、同窓会や、学校の熱望を忠実に披瀝したのであった。

『川口校長は定年のために御退職になると承り、学校職員も生徒一同も非常に残念に思つて惜んで居ります。特に同窓会の人々は、多数が会合して、母校のために熱議の結果、留任の御願ひをしてくれとの、とても熱心な申し出であります。鳥類研究で、山林を跋渉されるあの御健康と言ひ、御元氣と言ひ、生徒訓育の御熱意と言ひ、生徒の信頼敬慕と言ひ、誠に学校の為に残念だと言つて深く惜まれて居ります。年齢だけでの御退職は、残念だから、是非御留任の出来ませう、どうぞ、御高慮を願ひます。どうぞ各方面の希望を、お

取り上げ下さる様くれぐれも御願申すわけでございます」と力説した。

知事は長い顔を正面にして、私の目を熱心に見入って居た。黒ずんで、からびた顔の皮膚には、ところどころに短い鬚が点在して居た。私にはかけねはなかつた。

『ああ、そうですか』と言つたが、知事の顔面の無表情は、色のあせた洪壁の様だつた。私はどこまでも真剣だつた。

『御多忙中。御邪魔致しました。どうぞくれぐれも宜しく御高慮を願ひます』と言つて知事室を出た。私が在京中国会の傍聴で、難段の青木周蔵外務大臣が、望月小太郎議員に『此の外交失敗は此の○大臣の失策である』と大臣を指さしながら、面前で攻撃演説をしたあの時の海千山千の大臣の面もちで帰つて、今日の報告をしたのは、夜の十時過ぎであつた。それから何日かたつて川口校長退職願に訂正の通知が来た。そこで、数日の後、川口校長は、訂正したから、この退職願を視学官に渡して来てくれと言つて、開き封を私に渡された。私は明善校の放課後直ちに福岡県庁に視学官をおとづれた。ついたのは夕方ではあるし、視学官は料亭の常盤館の宴会に行つて居るから、そちらに行けば逢へるだろうと残留の役人が言つた。

常盤館は呉服町で、今の丸大デパートの少し東寄りの辺にあつた。夕闇は屋内にせまつて居た。女中の取り次ぎで、障子をあけて視学官は廊下に出て来た。

『川口校長の訂正辞表を持って来ましたから御覧下さい』と言つて渡すと、うすやみに顔をかたむけて一覽した。そして『あ、これによし。すぐ会が始まるから、君すぐ飛行便で出して下さい』と言つ

て視学官は私に返して障子の中に去った。もう暗い。帰りを急ぐあせりのため、つい受取ってポケットに入れ、早速常盤館を出て、博多駅の下り列車に飛び乗った。汽車はすぐ動き出した。やあ。しまった。切符を買いつゝ私は後悔した。併しもう夜だ。宴会は始まるだろう。引き返すのも失礼に当る。車中『大石よ貴様の不見識は何だ。汝は多年恩顧の川口校長の辞任が、一瞬でも速く実現する様に、貴様の手でやれるのか。どうせ結果は見えて居ても、汝の留任運動にも逆行だ。常盤館廊下のあわただしきになぜ糞おちつきをしなかつた。どうせ暮れた夜なのに。なぜ頑張らなんだ。』私の心は私を叱ってやまない。私にはこの管が痛かつた。車中これぞやんだ。よし明朝早速視学官に行つて、預つた辞表を返すでしょう』そう思うと、腹はキマツたが、夜あけは、メッポウ永かつた。翌朝、夙に起きて県庁に行つた。暫く待つ内に視学官は見えた。待ち受けた私はその書類を提出した。

「昨夜お預りした川口校長の退職願は、私の永く御世話になつた校長に対し、私の手で発送するに忍びませんので、失礼ながら、持つて来ました。視学官からお出し下さい」そういつて渡した。「あゝ、そうですか」と言つて、視学官は受けとつた。その視学官の態度は、平静であり、何等の屈托もない。私からすると、当然すぎる当然の態度ながら、この態度ならば、人事を預る役人として極めて公平に行けるだろうと、感じながら、一直線に明善校へ出勤の途に立つた。数日の後新聞に、県教職員の異動が発表された。今迄の福岡県視学官、檜崎広之助は川口校長に代つて、新明善校長に任命されたのであつた。

留任運動の名残りは其後暫くくすぶりやまなかつた。併し退職が

確定した以上は、学校の安定が急務である。動搖の鎮静こそ第一の要件である。派とか閥とか世間では言ひ、先輩とか後輩とか世情にはある。教育の事業にはそんな癌があつてはならぬ、寧ろそんな事を念頭に置かぬ方が却つてスムーズに、聖業は営める筈である。諺に知らぬが仏と世人は言う。目くら蛇におぢずの言葉もある。川口校長の後任が檜崎視学官である事は、勿論誰も知らない。私の活動は蓋があいて見ると、視学官の来任への阻壁作業の様なものだつた。全然知らぬ仏であり、蛇をおぢない目くらでもあつた。

併し成すべきをなし、やるべきをやつた。一点の気になることはない。其頃私の身上について色々下馬評、憶測或は杞憂を持つてくられる人々があつたらしく、あとてきいて私には、むしろアキラる様な意外の感さへあつた。併し人間は感情に誤られ易いので、スキやキラヒや、流派、賞閥の争斗が絶えない。而かも一般にはそれをあたり前の如くに考へられて、あやしまぬ人が多い。それは人間道の欠如、仁恕や同情の減退で利己の慾念にあやまれる結果である。

突然昭和廿五年四月のはじめ、板垣政参、檜崎広之助両先生は弊宅に来て一泊せられた。明善校で、昭和十一年四月檜崎校長と別れて、柳河高等女学校長に出てから七年、三瀬中学校長に転じて三年福岡県社会課に入つて、国宝重要美術、史蹟名勝天然記念物調査事業の一年、田代第一回公選町長、明善校夜間部へのタッチ、学大新教育研究会等に彷徨後、正に十五年目の檜崎先生との公式再会である。御来駕の要件は、今度久留米大学に、附設の高等学校が設置された。

就ては常任の講師として、国語漢文の指導に当る様にとの懇意である。そこで熟考の上、犬馬の労を尽すことになつた。入学試験も

済んだ二学級編成の第一回生である。専任教師数名と大学よりの応援教授数人の小世帯で元工兵大隊兵舎の古二階で、小野寺学長の訓示や板垣校長の告辞で開校の幕は切られた。日支事変に上海唐江鎮の爆弾三勇士を出したこの工兵隊の厩舎のあとには、おびたしい錆釘が散乱して居た。それを生徒と共に、拾い集めて石でこつこつ叩きのばして何やかと便利に使った。実に沢山の古釘だった。

当時敗戦後の思想界は混乱し、特攻崩れの暴虐が横行する時機で、日本道義の低下、物資の缺乏。やむなく公民館を設けたが地方青年団や、婦人会の指導にさへ確信の持てない世相であった。この不安を克服して将来、『国家再興の爲め、最も有為な人材を育成すべき校是を確立して、風潮になづまづ、世論に迷はず、青年の進路を中正に導く』附設高ではここに全力が傾注された。そして学生も父兄も亦努力をこゝに集注した。第二年目と第三年目には、霏々たる風雪の中を、市内の中学校へ自転車飛ばして熊懷先生と一巡したこともあった。

幸ひに年々に世間の理解と受験生の数とは累加激増して行った。虚無の室に古物商から、古い額を購って掲げ、古い戸棚や古い書庫を求めてだんたく学校も所帯らしくなつてゆく。その頃は学校も貧乏の極で、毎月の俸給も二回の分割払いで、それでも貰うのが気の毒だった。待遇などはどうでもよい。何級何号だかなんにも知らぬ。唯学校設立の理想貫徹に一心不乱である。甘い柿二本が切られ旧炊事場の大煙突も崩され、教室が増築せられ古便所が除かれ、自衛隊のブルドーザが応援に来て火薬庫の土手を押し、田畑を削つて運動場を広げてくれた。生徒は汗じつぱりで園芸研究所の山から、三原先生の指揮で古い兵車で真夏に土の搬入に頑張った。こんな奮

斗の結果、第一回の卒業生は、上階学校にすばらしい入学率を示した。俄然世人は驚異の眼を向け、学校の校風は、其緒につき健全なる伝統の芽も吹き始めた。するといつの間にか附設高に対する悪宣伝も起つて来た『附設高には理科室も実験の設備もないぞ』『附設高には運動スポーツが無いぞ』『附設高生は点とり虫だぞ』とくさぐさの非難が起つたらしい。

その内に大学の理科室借用も、やめて、物理。化学。生物室の新設で一年一年と施設は完備して来た。運動はあらゆる種類を体験し、ルールも完全に修得し、健康保持に完璧を期し、選手の養成はやらぬ方針だとわかるにつれて、自然に悪評の口実も消えていった。而かも年々上階校への合格は県内屈指の高率を示し、入学志願者の数も七倍以上の優秀生の競争場となり、多数の不合格者に対しては誠に同情に堪へぬ感じがする。開校以来十二年本校の卒業生も己に千二百人、次第に社会人として、各方面に活躍を始めて来た。父兄側の希望で、補習科を備へて己に数年、経営に企画に、人格の涵養に、道義的の躰に、或は思想信念の教育に又は体育に老いの至らんとするを忘れての精励であった。その板垣校長先ず去り、榎崎校長退き、一家族の附設校に、一抹の寂しさをおぼえしめたが、其の指導創作された人材は、日一日と世に伸びて行くし、功成り名遂げての隠退には榎崎校長も自ら心満ち足るものがあるべく、世人も又明確に之を認知してくれた筈である。

職員一同こゝに深く感謝の意を表し、杖立肥前屋の一夜をしのびつつ幾久しき御健勝を、お祈り申す次第である。萬緑の天地。

時は維れ、昭和三十六年七月一日。

第十五番の教室に於て、板垣学長代理によつて、榎崎校長の辞任

式は挙げられ、後任大内覚之助校長の就任式も完了し、蕩蓄有能の新校長を迎へて心強い感がした。引続き一番教室に於て父兄後援会は、歴代の会長、幹部、父兄の参会を以て、新旧校長の送迎会を開催し、和氣鬻然として宴も上首尾全員の万歳三唱と拍手とを以て前校長を見送った。

此の日天気快晴深緑鬱茂。

一同こゝに幸先よき校運の隆昌と、力強き将来の発展とを誓つて散会したのであった。この日檜崎前校長は、『本校には教員の組合もなければ、其の災禍もない全力を生徒の教育に打ちこむのだ』と言つた。正にその通りである。

思うに米国の日本占領策は、凡てを日本の弱体化で一貫した。中学の義務教育。地方の自治警察。共学制の強要、農地の解放。独占の禁止。労働の斗争。皆これ占領政策の一環であつた。そこで朝鮮の北緯三十八度線突破事件は、日本にとって思はぬ神風だつた。轟々たる団体的闘争と、集団的暴力は、果して我が国民の福祉にプラスと平和とを与へたか。

教員組合の職場放棄や、鉢巻行進はどれだけ父兄や生徒児童の尊信を高め得たか。教員の採用任命にはすでに資格の条件がある。それに人権も識見も使令一片で圧迫される様な不幸は、避けねばならぬ。米国は占領直後共産の手を放つて日本を犯そうとした。その注射の残滓もあろう。しかし生徒の指導で手一杯の附設高校には、教組はない。唯生徒の眞の幸福をねらう教育道あるのみである。邪道にはくみせず。利益にはくまぬ人間愛に生きねばならぬ。犯す者も犯される者も、相互に不幸である。校長の教師物色の苦心はこゝに在る。良き指導者を遇して迎える。檜崎校長の経営にもこゝに大

きな配慮を払つたのではなからうか。教師は学校教育の根幹だからである。

(三六・七・二)

